

障害者作品展に垣間見られる新たな意識の胎動
— 『ぴかっ to アート展』 来場者アンケートの分析を通して —

On The New Consciousness Found in An Exhibition of Art
Works by Disabled People
Based on an Analysis of the Questionnaire Completed by the
Guests of the Exhibition, “Pikatto-Art”

島先 京一
Kyochi SHIMASAKI

障害者作品展に垣間見られる新たな意識の胎動 — 『ぴかっ to アート展』 来場者アンケートの分析を通して—

On The New Consciousness Found in An Exhibition of Art Works by Disabled People Based on an Analysis of the Questionnaire Completed by the Guests of the Exhibition, "Pikatto-Art"

島先 京一
Kyochi SHIMASAKI

教授（共通教育センター：障害学・芸術学）

This paper aims to report the coming of new consciousness regarding the social activities of disabled people by analyzing the questionnaire distributed in an exhibition of art works by disabled people. Decades ago, the social activities of disabled people tended to be understood as very special opportunities in the social context, but today, many people regard such activities as common and necessary social events. By analyzing an questionnaire carried on an exhibition of the art works by disabled people. I can reveal a preferable tendency which is that many people love the art works by the disabled because of their artistic qualities.

はじめに—「ぴかっ to アート展」の概要

まず初めに、「ぴかっ to アート展」の概要と報告者のかかわりについて簡潔にまとめておく〔註1〕。

本展覧会は、2011年から滋賀県の当年の新規事業として始められ、2019年まで9回、開催されてきた。会場は草津市にある、県内でも有数の大規模商業施設「イオンモール草津」で、館内施設の無償提供を受けてきた。展覧会の運営に当たっては、健康福祉部をはじめとする滋賀県庁内の複数の部署と、県内の障害者団体や社会福祉事業所等の関連組織による実行委員会が組織され、「公益法人滋賀県手をつなぐ育成会」が事務局を担当してきた。会期は例年、11月の最終週から12月の第1週目にわたる10日間が設定され、毎年、一千人以上の来場者を迎えてきた。

以前にも報告しているが、「ぴかっ to アート展」の展覧会としての最も重要な特色は、氏名が公表される専門家による審査が行われる公募展であるという点にある。審査は2段階に分けて行われ、第1次審査では写真データにより出品の可否が審査され、第2次審査では実際の作品を見ながら展示の可能性の確認と各種の受賞作品の決定が行われる。平均すると第1次審査で入選作品は応募作品全体の3分の1から4分の1に絞られ、過半数の作品に落選の烙印が押されてしまう。

作品応募資格については、募集要項に次のように記載されている。「滋賀県在住、または滋賀県の学校、施設、病院を利用している障



写真 1, 2, 3, 4 会場風景
(撮影 報告者)

害のある方（身体障害者手帳、療育手帳もしくは精神障害者保健福祉手帳を有する方、およびその取得に準ずる障害のある方）」。障害者について本応募資格は、厚生労働省をはじめとする公的な機関の発行する手帳の有無に基準を置いており、基本的には社会的な認定に根拠を求めているが、最後に「その取得に準ずる障害のある方」という項目を加えることによって、基準の拡大解釈の余地を残している。いわば障害者の規定について、厳密さよりも柔軟な理解の可能性を担保しているのであるが、このことは、各種の障害者運動や障害学の進展が障害者理解のさらなる深化を精力的に追及している現状においては、新たな方向性や基準を求める社会的な意識と軌を一にするものであり、好ましい事態の推移として評価したい。

会場として「イオンモール草津」から提供を受けている「イオンホール」は、主に展示会や講演会等の開催のために設けられた、240平方メートルの多目的タイプの貸会場である。「イオンモール草津」のほとんどの店舗スペースとは異なり、壁による空間の独立性が確保されていることによってイベント会場としてのある程度の条件は満たしている。ただし展覧会のための専門的な空間ではないため、照明設備や壁面の状態に関しては、作品展示のための理想的な条件を満たしているとはいえない。「ぴかつ to アート展」では、民間の展示業者に協力を依頼し、一時的な造作壁面を搬入するなどの工夫によって、展覧会場としての質の向上を図ってきた。しかし予算や関係者の就労条件、そして現状設備との適合性などの問題もあり、改善すべき点は少なくない。2019年の会場風景写真を掲載する。(写真1, 2, 3, 4)

報告者は、以前の報告でもふれているが、第7回の「ぴかつ to アート展」から、展示計画の立案ならびに実行の担当者として関わってきた。展示計画を通して一つ一つの作品の魅力をできる限り公正かつ最大限に引き出したいと願ってきた報告者の実践は、いまだ改善の余地が多く、発展途上の過程にあるが、関係各位のご理解とご協力が得られてきたことによって、回を重ねることによって蝸牛のごとき進展を見せているものと、ひそかに自負している。

アンケート分析の目的と方法

「ぴかつ to アート展」では、来場者に対してアンケートへの協力を依頼している。アンケートの詳細については以前の報告を参照してもらいたい。アンケートは、主に、回答者の属性や本展覧会に来場した経緯について尋ねる設問と、障害者による作品展について尋ねる設問、そして本展覧会の感想について自由に記述してもらう設問から構成されている。本報告は、2018年の第8回展と2019年の第9回展のアンケートの、展覧会の感想を自由に記述してもらう設問に対する回答を分析し、障害者福祉や障害者理解に関する新たな

視点の可能性を示唆してくれるような種子を探る。

本報告は、前回の私たちの報告と同じく、統計的な分析を目指してはいない〔註2〕。報告者は、社会学的な学術考察における統計的な分析の意義の重要性は認識しているが、しかし報告者自身が統計的な手法の理解と実行に対して殆ど素人の域を出ないことを告白しておく。本報告では、現状について客観的かつ科学的に分析することよりも、収集されたアンケート協力者の語りの中から、潜在的な可能性を探ることに重点を置く。多くの回答者から寄せられた共通性をもつ語りの重要性は尊重しつつ、数の上からは少数者の声に分類され得る語りについても注目し、場合によっては、特殊な背景から発せられたと考え得る語りの中にも潜在的な可能性を探っていきたい。この意味で本報告に対しては、科学的な学術報告としての資格に疑義が寄せられる恐れが大であるが、しかし学術報告としての厳密さを重視することよりも、将来の可能性について共感的な語りを探ろうとする挑戦的なエッセイであることを目指したい。

なお本報告の考察対象であるアンケートの回収総数は、2018年の第8回展が879通、2019年の第9回展が717通、合計、1596通である。統計的な分析のための母数としてこの回収総数が科学的な分析の客観性を担保してくれるかどうかは判断できないが、できる限り多くの人びとの声に学びたいと願う本報告の趣旨には叶うものと思われる。

展示作品についての感想を述べた回答

「ぴかつ to アート展」来場者アンケートには最後に自由記述設問があり、次のように問いかけている。「今回の展覧会をご覧になった感想をお書きください」。この問いかけにはまさに自由記述設問にふさわしく、様々な回答が寄せられる。今回の報告ではこれらの回答を大きく、展示作品に関する感想、本展覧会に対する感想や意見、そして障害者による芸術活動全般に関する感想や意見に分類し、考察する。本節では、2018年の第8回展および2019年の第9回展の展示作品に寄せられた感想を分析する。

まず分析対象回答の数量について記そう。2018年第8回展のアンケート回収総数879通のうち、展示作品についてのコメントが寄せられた回答は135通、2019年第9回においては総数が717通で作品に対するコメントを含む回答はそのうちの78通、2年間を合計すると、総数が1596通、作品についてのコメントは213通であった。

ただし今回の考察においては回答の抽出に当たって、一般性が高いがゆえに対象を特定することが困難な形容詞を用いた回答は分析対象から排除したことを断っておく。例えば、「素晴らしい!」といったような回答である。展覧会の運営に携わった一人としては、この

ように無条件で絶賛してくれるコメントが数多く寄せられたことはうれしい限りではあるが、展覧会の何が素晴らしいのかについてこのような回答は何も語ってはくれない。あるいは「素晴らしい展覧会でした」、または「素晴らしい作品ばかりでした」といった回答も、それらがどのように「素晴らしい」のかについては、回答に込められているであろう熱意と裏腹に寡黙なのである。そのような回答を分析対象から排除したのは、障害者の芸術活動に対するできる限り多様な観点や意識を抽出したいという、本報告の特別な趣旨に基づいていることであり、特に他意はない。

報告者は全ての回答を確認したのちに、展示作品について特定の形容語を用いて評価したコメントを、その評価語の大まかな内容に従って次の七つの項目に分類した。「作品の色彩に関するコメント」、「表現の細かさ、繊細さに関するコメント」、「制作の丁寧さに関するコメント」、「作品の発想についてのコメント」、「個性、あるいは個性的という言葉を用いたコメント」、「自由という概念を用いて評価を行ったコメント」、そして「上手という評価語を用いたコメント」である。これらの分類のうち、「発想」、「個性」そして「自由」という評価語に基づく項目は、内容面からは相互に重なり合うことがあり得るが、今回はそれぞれの評価語が用いられているということをも唯一の基準として分類を行っている。「作品の色彩に関するコメント」という分類においては、「カラフル」、「色彩」、「色使い」という単語が登場するコメント、および「色」という単語が単独で用いられたコメントを対象とした。またどの分類においても、評価語が平仮名混じりおよび平仮名のみで表記されたコメントも、分析対象に含めた。というのも、そのような一見、稚拙に見える回答は、知的障害当事者による回答協力である可能性が高く、報告者の関心からは最も重視すべきデータのの一つであると判断されるからである。実際、展覧会場には、知的障害者が利用者の大半を占めると思われる施設の皆さんが団体で訪れることも少なくなく、利用者の多くの人びとがアンケートに協力してくれている。またそのような形で、障害者の社会参画の一つの機会として利用されている事実も、本展覧会の誇るべき特質の一つとあってよいであろう。

以下にそれぞれに分類された回答数を表に示す。

	色彩	表現の細かさ	制作の丁寧さ	発想	個性	自由	上手
第8回	50	7	7	17	31	9	14
第9回	18	4	5	10	31	7	3
合計	68	11	12	27	62	16	17

これらの評価分類のうち、「色彩」、「表現の細かさ」、そして「制作の丁寧さ」は、一般の来場者にアピールした、作品の外部に現れた特徴に着目した項目であり、「発想」、「個性」、「自由」、そして「上手」という評価語による分類項目は、作品の外部に現れた特徴に対

して来場者が作者の内面に対して積極的に解釈した回答をまとめたものである。

一般の来場者が魅力を感じた、作品の外面に現れた特徴、あるいは広い意味での造形的特徴が「色彩」、「表現の細かさ」、そして「制作の丁寧さ」の3者に集約されたのは、いわばこれらの特徴が、知的障害者を中心とした美術作品全般に窺うことのできる重要な特質であることを表していると考えられると理解することができるであろう。

中でも「色彩」に注目した回答数が突出していること、特に2018年第8回展において作品に対するコメント回答の3分の1強を占めている点は、注目すべきであろう。障害者による芸術作品、特に知的障害者による平面作品の色彩の使い方が多くの人びとを魅了する理由については、いくつかの仮説を考えることができるかもしれない。

仮説の一つ目としては、一般の鑑賞者の文化的な背景に関わるものであるが、マンガやアニメを中心としたいわゆる二次元キャラクター・カルチャー〔註3〕の、芸術という社会的な文脈への浸透が挙げられるのではないか。印刷物としてのマンガが原点の一つである二次元キャラクター・カルチャーは、現在ではデジタル・メディアを介することによって生活のさまざまな局面に浸透した。かつては青少年の過渡期的な娯楽の表層の一つに過ぎないとみなされていた二次元キャラクター・カルチャーは、今では芸術のみならずさまざまな文脈の中で過小評価することのできない、重要な社会的要素とみなされるようになってきている。そしてそのような二次元キャラクター・カルチャーの多くは、原色を中心とした鮮やかな色彩表現を伴うことが多い。そのような色彩感覚が芸術表現や鑑賞の文脈において、重要な意味を持ち始めており、そのことの一端が今回のアンケート回答に現れたのではないかと思われるのである。

二つ目の仮説は、報告者がこれまで行ってきた障害者福祉施設への訪問調査経験に基づいている。

知的障害者の日常的な活動として作品制作を取り入れている施設では、油性や水性のマーカーや、クレヨン、そして色鉛筆といった画材が好んで用いられるようである。これらの画材の最も重要な特徴は、使用や管理に手間がかからず、しかも発色性に優れているという点であろう。特に色彩表現のための混色作業を行わなくてもよい点は、知的障害者の自由な表現活動のためには極めて有利に働く。水彩絵の具のような混色による自由度の高い画材を利用者に提供している施設もあるが、多くの場合、利用者の制作活動をサポートする施設職員があらかじめ混色の過程を代行している。そして岩絵の具や油絵の具のような、使用や管理に際して専門的な知識や技能が必要とされる画材が好んで用いられることは、稀な事態であろうと思われる。そのような事態の一つの必然的な結果として、知的障害者の平面作品の多くは、彩度の高い、いわゆる原色と呼ばれる色彩

が多用されることになる。そして作者の制作心を大いに刺激したであろう、大胆な原色の数々は、アーティストたちの恐らくは直観的かつ率直な審美眼によるアレンジが施されることによって、一般の鑑賞者が忘れかけていたかもしれない感性に揺さぶりをかけてくるのではないだろうか。

以上、「ぴかつ to アート展」の来場者の多くが、展示作品の色彩に強い関心を示していたことの要因について、現在の視覚文化環境の特質の一つと、障害者の利用し得る制作環境とそれがもたらす利点に求めることができるのではないかという仮説を述べた。これらのうち現在の視覚文化において原色が特に好まれるのではないかという仮説は、もちろん、障害者の芸術表現の特徴について語る際に有効であるにはとどまらない。古くは1980年代のニュー・ペインティングの隆盛に始まる、ポストモダンやトランス・アヴァンギャルドといった時代概念で形容される、大きな芸術思潮のうねりとも対応するものとして捉えることも可能であると思うのである。

次に、展覧会の来場者が作者の内面について寄せたであろうアンケートの回答について考察していく。それらの回答の中で、「発想」、「自由」そして「個性」というキーワードを含むものは、一つの連続する文脈の中で捉え得る共通項目とみなすこともできよう。というのも、障害者、特に知的障害者による芸術表現は、彼女／彼らの「発想」が「自由」であり、それがゆえに「個性」的であると理解することができるからである。2018年第8回展と2019年第9回展の自由記述回答の総数、213通の中で、この三つの形容語を含む回答数は105通に上り、ほぼ2分の1に相当する。「ぴかつ to アート展」の来場者の多くが、作者の「自由」で「個性」的な「発想」に魅了されていることがわかる。そしてこの三つの形容語の中で、「個性」という言葉の採用頻度が過半数を占め、他を圧倒していることにも注目しておきたい。

これらの形容語を含む回答の背景には、非常に緩やかではあるが確実に進展していると期待される、社会全体の障害者観の変化発展があると思われる。作者たちの「自由」で「個性」に満ちた「発想」に魅かれるという率直な来場者の感想には、来場者たちの意識の中に障害者アーティストたちに対して親しみの感情があり、そしてある種の憧れや羨望の感情があることを表しているとはいえないか。以前の報告でも考察したように、かつての私たちの社会には、知的障害者をはじめとする障害者に対して穏便に無視するという傾向が窺われた〔註4〕。かつて私たちは、障害者たちに対して憐れむべき存在として特別視し、社会活動の一般的なステージからは排除してきたのである。しかし私たちの社会意識は、ゆっくりとではあるが確実に変化し、障害者の存在や彼女／彼らの社会参画を当然のこととして受け入れるようになってきている。彼女／彼らの芸術制作活動に対して親しみを感じ、そして憧れや賞賛を表明しているアンケー

ト回答は、そのような社会意識の変化に対応するものであると捉えたい。さらに、それらのアンケート回答にあらわれた「個性」、あるいは「個性的」といった評価語の圧倒的な多さは、「障害は個性である」という、最近になって共感者が増え、市民権を獲得してきた障害者観の台頭に呼応するものとして理解することができる。

展覧会そのものに対する意見や感想を述べた回答

本節では、第8回、第9回の「ぴかつ to アート」展来場者アンケートの自由に感想を記述してもらった設問に対する回答の中から、本展覧会そのものに対して意見や感想を述べた回答を紹介し、分析していく。

展覧会の運営方法等についても、さまざまな具体的な意見や提案が寄せられた。それらの中でも比較的、多く見られたのが、作品とともに出品作家の情報を展示してはどうかという提案と、展覧会そのものの広報活動をもっと積極的に行うべきであるという意見であった。

出品作家の情報の開示に関する提案は、展覧会の展示の一部にそのような提案を呼び起こすようなきっかけがあった。「ぴかつ to アート」展は毎年、以下のような賞を設けている。大賞1点、優秀賞2点、佳作3点、審査員特別賞、数点。これらの賞の入賞作品に対しては、展覧会の最終日に表彰を行い、また特別な壁面を設けて他の入賞作品とは異なる特別枠での展示を行っている。そして大賞と優秀賞の3点の作品については、作者のプロフィールと制作中の写真を展示している。出品作家の情報の展示を提案した来場者の何割かは、この入賞者の情報展示に触発されたものと思われる。

出品作家の、障害の種別や程度、そして年齢等の、いわゆる個人情報について知りたいという来場者の思いは、おそらくは純粋な知的かつ美的な好奇心に基づくものであろうと想像される。それは障害者に向けられた特別な関心に基づくものというよりも、感銘を受けた芸術作品に出会ったときに普通に生じる、作者に対する関心と同じものであるといつてよいと思われる。そしてその作者に対する関心の一部に、前節で取り上げた「自由」な「発想」による「個性的」な作品の根拠の一端を求めたいという思いがあるのであろう。

しかしこれらの情報の開示、あるいは展示には、実際的な課題と理念上の問題点が伴う。例えば実際的な問題として、どのような情報を開示するのか、そしてその展示方法はどうかあるべきか、さらには情報を開示するパネル等を展示するための壁面の余裕があるのか、などである。しかしまず取り組むべきは、個人情報の開示の是非に関する問題の抽出と検討であろう。「ぴかつ to アート」展の応募用紙には、作品の展示や展覧会の広報のための個人情報の開示についての許諾を明示する欄がある。もちろん出品当事者の判断が期

待しにくい場合は、アドヴォケート（代理人）に記載をお願いしている。しかし作者本人やアドヴォケートの許諾が得られていれば、個人情報開示の十分条件が満足されていると短絡的に了解することもできないと思われる。特に障害の種別等に関わる情報は、その用語に対する一般的な共通理解が未成熟であることから、単なる法制上や慣習上の問題としては処理できない、複雑な問題を引き起こす。作者の障害に関する個人情報の開示は、本展覧会に過度に政治的な志向性への偏重をもたらす可能性もあり、慎重な検討を必要とするであろう。

展覧会に対する意見や感想の中で、次に多く寄せられたのが、広報活動に関する提案であった。もっと広報活動に力を入れるべきであるという原則的な指摘から、具体的な方法やメディア等についてのアイデアを示す具体的な提案まで、多岐にわたる意見を拝読することができた。報告者は展覧会実行委員会の構成員ではないので、展覧会の内部事情についても部分的に承知しながら、しかし責任の乏しい感想を述べるにとどまるが、広報活動が十分には行えていないのは、多くのアンケート回答の指摘のとおりである。しかしより効果的な広報活動のための資金や労働資源が、決して潤沢に準備されてはいないのも実情である。寄せられた意見を参考にしながら、可能な努力の方向を探っていくべきであるという、平凡ではあるが、現実的な結論を述べるにとどめる。

来場者アンケートの回答の中には、展覧会の展示方法そのものに対する意見も散見された。多くは展示の不備に対する指摘であったり、より良い展示のための提案であったりと、具体性に富んだものであった。これらの意見や提案に対しても、展示担当者としては大いに参考にしながら、より良い展示を目指していく。

広報活動や展示方法に対するあたたかい、そして場合によっては厳しい指摘がアンケートに寄せられたことは、しかしアンケート回答者の殆どが、展覧会そのものに対してきわめてよい感想をもったことのあらわれとしても理解できるのではないだろうか。回答者の多くが本展覧会に対して、素晴らしい作品を見ることができた、作品の鑑賞によって有意義な時間をもつことができた、あるいは展覧会の意義を強く感じた等の、非常に積極的で好ましい印象を感じてくれたがゆえに、そのようなプラスの感想を他の人びとも共感的に伝えたいという思いから、極めて前向きで、場合によっては辛辣な意見を寄せていただいたのだと思われる。関係者のひとりとして強い感謝の気持ちを感じるとともに、本展覧会の意義の重要性を改めて認識させられる。

新たな展覧会の展開を希望する企画提案タイプの回答も、散見された。それらの多くは、会期を延長してほしい、他の会場にも巡回してほしいといったような、本展のような展覧会の機会を増やしてほしいという要請であった。中には、特定の出品作家の作品を特集

した展示が見たいといったような、出品者の作家性に注目した提案もあった。このような意見は、常連ともいえる応募作家が存在し、毎年、本展を楽しみにしている来場者があって初めて成り立つものであり、回数を重ねてきた本展の展覧会としての、そして社会的なイベントとしての成熟を裏付ける貴重な意見として尊重したい。

障害者による作品展という範疇をめぐる回答

展覧会の概要について紹介した節でも確認したように、「ぴかつ to アート」展は出品者を「障害のある方」に限定し、「障害のある人による公募作品展」であることを前面に出している。自由記述設問に対するアンケート回答の中には、この展覧会の前提条件そのものに対して疑問を呈しているものも散見された。すなわち、作品や展覧会の成否と、障害者か否かという作者の属性は本来、無関係であり、切り離して考えるべきものであるという意見である。ことさら障害者による作品展であるという点を強調してしまうと、作品を楽しむためには不要な条件が課されてしまい、作品がもともと有していた魅力が減ぜられてしまうのではないかという、やや憤りにも近い感情も含んだ意見であろう。そしてアンケート回答の中には、このような展覧会企画の根本に対する疑義ではないが、展示作品の美的な質の高さゆえに、障害者による作品展であることがわからなかったという、興味深い告白もいくつか見られた。

出品者を障害者に限った作品展の意味や意義という問題は、確かに私たちに重要な課題を突き付ける。障害者の生活支援や社会参画促進といった障害者福祉の観点から考えれば、障害者のみに出展を限った展覧会は社会的な重要性を担う。しかし優れた作品やそれらがもたらす美的な興奮を共有したいという純粋に美的な関心から考えれば、出展者の資格という要素は、あくまで付随的な条件に過ぎず、場合によっては美的判断にとって阻害的な要因ともなり得る。障害者に対する理解や共感が進展しつつある現状においては、障害者に参加資格を限定した営みの中には、その枠組みの再検討が必要なものも現れ始めているのかもしれない。

報告者は、障害者による芸術作品に対してあくまで作品として対峙すべきであるという議論に対して一定の理解をもちながらも、また異なる方法論の可能性について考えている。これまでいくつかの機会に報告してきたように、障害者による芸術活動の成果発表については、障害者福祉の専門家と当該の芸術分野の専門家の協働を前提としながらも、芸術分野の専門家のリーダーシップがより重要性をもつであろうことを指摘してきた。しかしそのことは、障害者による芸術活動という範疇の発展的な解消の促進に賛同することを意味しない。というのも、意味の複合体としての芸術作品の価値の体系性を重視したいからである。すなわち、障害者による芸術作品

は、オブジェとしての作品単体がもち得る価値のみならず、社会的に発信され享受されるシステム全体がもたらし得る価値も含めて、複合体としての意味体系をもち得る。私たちは作品自体のみならず、そのような意味複合体としての作品の中に、さまざまな価値を見出しているのではないかと考えているのである。この課題については、今後もさまざまな機会を利用して、考察を深めていきたい。

終わりに

「ぴかっ to アート」展、来場者アンケートの自由記述を求めた設問には、多くの来場者から寄せられたさまざまな声を集めることができた。作品展示担当者として何回か会場に足をはこんだ報告者も、展覧会を楽しんだ後に熱心にアンケート用紙に鉛筆を走らせている多くの来場者の姿を目にした。「ぴかっ to アート」展来場者の熱い声は、本展に対する関心や、障害者の芸術活動全般に対する関心の高さを示してくれると同時に、さらなる広範な文化的関心の高まりも示唆してくれているように思われる。

これまで見てきたように、来場者アンケートには展示作品や展覧会に対するさまざまな意見や感想が示されていた。それらには、作品や展覧会を絶賛する嬉しい内容のものから、当方の力不足を指摘する耳に痛い内容まで、多岐に渡る見解が含まれているが、全てに共通していると思われるのは、本展に対する共感的な立場から寄せられた声であると思われる点である。数居の高い文化行事としてではなく、積極的に意見や感想を述べて良いイベントとして本展を捉えてくれたがゆえに、忌憚のない声が届けられたと思われる。すなわち本展の観覧を通して、少なからぬ来場者が、展覧会という営みに対して主体的に考える機会をもってくれたとはいえないか。この点にも、障害者による芸術活動の社会的意義の一端を窺うことができるように思われる。障害者の社会参画を促進する営みは、しかし同時に全ての人びとの社会参画について再考する機会をもたらしつつも考えられる。

本報告が積み残した課題は少なくない。今後とも共感的な観点を堅持しながら、芸術活動を通じての社会参画について実践ならびに考察を展開していきたい。

- [註1] 「びかつ to アート展」の公式の情報源としては、展覧会事務局の「公益社団法人滋賀県手をつなぐ育成会」が運営するウェブサイトがある。(shiga-ikuseikai.jp) また報告者による過去の学術報告も参照されたい。鳥先京一、「知的障害者による芸術表現の社会的受容に関する一報告—第7回『びかつ to アート展』をめぐって—、2018年、成安造形大学紀要第9号、鳥先京一、「第8回『びかつ to アート展』展示計画を実施して—障害者作品展の諸課題—」、2019年、成安造形大学紀要第10号。
- [註2] 註2の拙報告、2018年。
- [註3] オタク・カルチャーという表記も考えられる。
- [註4] 報告者拙稿 「知的障害者をめぐる差別的な認識をめぐって」、2014年、成安造形大学紀要第5号

